

## プロローグ 壊れた親友の隣で

「……ん、まぶしい」

窓から差し込む朝日が、私の両目を鋭く責める。

「そっか、私、寝ちゃったんだ」

寝ぼけ眼の私の前に広がったのは、ベッドの上に寝静まる、一人の女の子がいる光景。

ここは、四ツ葉病院の一室。そして、目の前にいるのは、私の親友の蒼乃美希ちゃん。

彼女は今、心の病に苦しめられていて、心身共にボロボロの状態。

そんな彼女の看病をしながら眠ってしまったのが、私こと、山吹祈里なのです。

「おはよう、美希ちゃん」

優しく微笑むように、目の前の親友に声をかけたものの、返事は返ってこない。どうやら、深く眠っているようで、私は安堵しました。

先程も言った通り、美希ちゃんの心身はボロボロの状態で、意識がある時はずっと、自分の股間に手を伸ばしてしまっています。それが、私にとっては目を逸らしてしまいたいぐらい怖い。もし、目の前にいるのが知らない人だったら嫌悪感を催してしまいそうで、そんな自分を恥じてしまいます。

その原因は、ナケワメークという怪物で、彼女はその怪物に負けてしまい、その後遺症で彼女の心は壊れてしまったのです。

そう、私たちはプリキュア。四ノ葉町の平和を守る正義の味方……なんて、まるで誰かに語るように説明する必要はないのだけれど、それでも、自分で一度整理しないと、現実として受け止めきれそうにないのが今の私。

私たちプリキュアは、ラビリンスという組織と戦っていて、これまでは負けることなんてなかったの。だから、一昨日が初めての惨敗。その代償はとて大きくて、目の前の美希ちゃんの姿を、こんな風に言い聞かせて無理やり現実として受け止めるのが精一杯。私の変身した姿、キュアパインは精神に干渉して治療をすることが出来るのだけれど、美希ちゃんを、キュアベリーを救うまでには至っていない。

それでも、私にしか出来ないことから、昨日からこうして付き添い、看護師さんがいない間を狙ってパインフルートで癒しています。でも……状況は何一つ好転していません。

それでも、必ず治るって信じてる。私が頑張れば何とかできるはずなのです。だから、一生懸命頑張るの。みんなのために、美希ちゃんのために……

「あ、もうこんな時間、そろそろ学校に行くね。行ってきます。美希ちゃん」

時計の針は8時に差し掛かっていて、学校に遅刻しないためには、ここから歩くとそろそろ限界。だから、私は目一杯明るい笑顔で、目の前の美希ちゃんに声をかけながら椅子から立ち上がる。

返事のない親友を背にした私は、ただただ、苦い気持ちに押しつぶされそうでした。

## 第一章 小さな幸せ

それから私は、少しでも冷静になろうと勉強に励みましたが、静かになればなるほど美希ちゃんの姿が頭をよぎって、少しだけエツチな気分になってしまいます。

狂ったように股間を、おまんこを触る美希ちゃんの顔があまりにも気持ち良さそうで、そんなに気持ちが良いなら、私も触ってみたい……なんて邪なことを、考えてしまうのです。

そんな誘惑を抑え込んだ私は、なんとかお昼休みまで持ちこたえることができました。

戻ってきたクラスの喧騒が、私の恥ずかしい思いを吹き飛ばしてくれたのです。

「いのりー、一緒にたーべよ」

お昼休みが始まり、私が一息ついてすぐ、隣の席の由比ちゃんが、お弁当を机に置きながら私の机にくっつけてきます。そして、私の返事も聞かず、由比ちゃんは楽しそうに話を始めました。

「いんやー、さっきはありがとね。祈里がいてくれてほんと助かった。ありがとう」

「みんなと仲直り出来たなら、それで良いよ。由比ちゃんが元気なら、私も嬉しいし」

「いのりー。やっぱり祈里は、最高の友達だよ！」

だったけど、たまには勇気を出してみるのも良いよね。

「由比、あんまり祈里に迷惑かけるんじゃないわよ」

「よ！まほまほ」

「まほまほ言わないで」

まほまほと呼ばれて怒っているのは、由比ちゃんの幼なじみの佐々木真帆ちゃん。瞳が鋭くて、第一印象は少し怖いけど、クラス委員長もやってくれてる凄く真面目で優しい女の子。初めは由比ちゃんに強引に連れてこられて、半ば無理やり二人の間にお邪魔させてもらっていたけれど、今では真帆ちゃんとも友達になりました。

「祈里、今日も一緒にお弁当、良いかしら？」

「もちろん。一緒に食べよう」

それから、お昼ご飯を食べながら、真帆ちゃんと一緒に由比ちゃんの雑談や愚痴を聞く、いつもの昼食が始まります。

「やっぱりさー、祈里は頼りになるっていうか、あんたに聞いてもらえると落ち着くわ」

「そ、そうかな？」

「祈里ってさ、私の話ゼーんぶ、文句も言わずに聞いてくるもんね。ほんと、祈里大仏の神様には感謝しております」

「大袈裟だってば」

今日の由比ちゃんは、いつも以上に私を褒めてくれて、なんだかこそばゆいです。



るのが似合ってるだけで……でも、こんなこと口が裂けても言えないな。

「由比、私はどうなの？ 祈里とは違うっていうの？」

「真帆はほら、祈里の前だと毒づかないけど、二人きりだとほら」

「ほら、何なのよ？ はっきり言ってみなさいよ」

「だから、そういうところだってば」

それにしても、二人はいつも本当に楽しそう。まるで、ラブちゃんと美希ちゃんを見ているみたいで、微笑ましくなってきた。

## 第二章 飲み込まれていく体

昼食を食べ終えてからの午後の授業中、内股を擦り合わせていた私は、なんとか放課後まで耐えしのぐことができました。でも、それが限界で、私の頬は暑くなり、体は既にエッチな気分侵食されてしまっていたのです。

「いーのり、一緒に帰ろう！」

「……あつ、ごめんね、由比ちゃん。私その、少し用事があるから、先に帰ってくれるかな？ 本当に、ごめんなさい」

だから、由比ちゃんの声にも、すぐには反応できなくて、取り繕うように席を立った私は、急いで教室を飛び出しました。

歩く度に股間が擦れて、甘い声が漏れそうになるのを必死に我慢しながら、私は女子トイレへと飛び込みます。

「……なんで、こんな……美希ちゃん」

病院のベッドの上で股間をまさぐり続ける美希ちゃんの姿が頭から離れず、うわ言のうちに私は美希ちゃんの名前を口にします。

とても不謹慎だけど、美希ちゃんの表情エッチだったな……私も、オマシコを触れば、あんな風に。

スカートをたくし上げた私は、おそろおそろのショーツの上から股間部分を撫で上げると電流の流れるような感覚が全身を駆け巡ります。

「ひゃん」

自然と甘い声が漏れ出て、慌てて私は両手で口を押さえます。

ここは学園のトイレ、はしたない声をあげたら、後でどうなってしまうかわかりません。エッチな女、変態女なんてレッテルを貼られたら、由比ちゃんや真帆ちゃんにもきつと嫌われてしまいます。

だから、私は声を漏らさないように、慎重にショーツの上から股間を擦り続けました。

「んんっ！」

凄いい、気持ちいい。いつもは怖くて、少し触れただけでやめてしまうのに、あまりの快樂の波に、指が止まりません。

「美希、ちゃん……んんっうう！」

頭の中には、美希ちゃんがだらしない表情で、オマンコの中を自分の指で掻き回している姿が映っていて、私もそうなりたい一心で、指を動かしていました。

でも、ショーツの上からでは思ったほどの刺激は味わえません。そう、私の体はふしだらにも、なぞるだけでは物足りなくなってしまうていたのです。

もつと奥に触れたい……そんな思いでショーツを下ろした私は、スカートをたくしあげ自分の股間をじっくりと眺めます。

粘液が糸を引く自身のオマンコに興奮を覚える私でしたが、それでも慎重に、恐怖を乗り越えるような感覚で、股間の奥へと中指を沈めたのです。

「んんっ！んっ！ああ！」

瞬間、先程とは比べ物にならない程の快楽が、私の全身を襲います。一斉に毛穴が開くような感覚に、私は腰を前に突き出し、ひたすらに指を出し入れし始めてしまいました。

くちゅくちゅと鳴り響く粘液の音に、羞恥心を覚えてしまう私。なんてはしたないのだろうと思いつつも、頭の中で思い出す美希ちゃんの動きと同じように、私も指を動かします。

「やだ、美希ちゃん、こんなの、ダメ……」

きつと、まわりにも聞こえている。そんなことはわかっているはずなのに、それでも私の体は、我慢も歯止めもきかないほどに欲情しきっていました。

## 第六章 優しさの代償

「由比ちゃん！真帆ちゃん無事！無事だったら返事して！」

一箇所だけシャッターの開いていた、薄暗い倉庫を歩きながら、私は声を張り上げます  
すると、反響する足音の中に、小さな声が混ざるのが聞こえました。

「い、いのりー！ここ、たすけ……」

「由比ちゃん！？」

微かに聞こえた由比ちゃんの声を頼りに、私は倉庫の中を走ります。

そして、ナケワメーケの黒い縄に拘束された、二人の友達を見つけたのです。

「ダメ、祈里。きちゃ、ダメ！」

私の姿を見つけ、叫んだのは真帆ちゃんでした。遠くからでもわかるぐらい、恐怖で表情が歪んでいます。

「祈里、助けて。祈里、こわいよー」

真帆ちゃんの隣で震える由比ちゃんも、目を瞑り、一心不乱に私に助けを求めている、普段見たこともない二人の姿に、心臓が握り潰されるような痛みを感じたのです。

「山吹祈里確認。一人で、来たようだな……」

「はい、約束通り一人で来ました。二人を、解放してください」

「承諾、不能。安全は、保証する」

敵の狙いは私。そう考えての交渉でしたが、まるで相手は機械のように、否定の言葉を淡々と紡ぎます。

「つまり、二人を助けるには、あなたを倒す必要がある。と言うことですね？」



返事はない。でも、その沈黙を、肯定として受け入れることしか、今の私には出来ませんでした。

「祈里、無理よ。逃げて！」

「大丈夫だよ、真帆ちゃん。それに、由比ちゃんも。私が絶対に、二人を助けるから」

自分のことよりも、私を心配してくれる真帆ちゃんと、怯え続ける由比ちゃんに微笑みかけると、私はスカートのポケットから、リンクルンを取り出します。

美希ちゃんのこと、ラブちゃんとの約束、ナケワメーケに対する違和感。いろんなことが頭の片隅をよぎりましたが、それらを振り払うように、私は強くリンクルンを握りしめます。そして、大きく一つ深呼吸をすると、反対側のポケットからリンクルンキーを取り出し、リンクルンの上から差し込むと、開いたリンクルンのボタンをなぞりながら私は叫びました。

「チェンジ！プリキュア、ビートアップ！」

優しく輝く黄色い光に包まれた私は、ステップを踏むように回転すると、吸い込まれるように開いた空間へと落ちていきます。

落下しているはずなのに、まるで恐怖を感じさせない温かさが、フリルとふわふわに彩られた優しい衣装へと変わっていきます。それと同時に、髪の色も茶色から黄色へと変化し、キュアパインとなった私は、笑顔で地面へと着地しました。

「イエローハートは、祈りのしるし」

そして、腰から胸にかけて両手で作ったハートを走らせると、手を叩き、気合いを入れて私は叫びます。

「とれたてフレッシュ！キュアパイン！」

その場で一週回った私は、ジャンプと共にその名前を口にしました。

キュアパイン、それは、私を強くしてくれる鎧であり、守るという覚悟の印。この癒しの力で、由比ちゃんと真帆ちゃんを、絶対に救ってみせる！

「祈里、その姿って……」

「何？ どうしたの、真帆……嘘、祈里が、プリキュア？」

「ごめんね二人とも、今まで黙ってて。でも、もう大丈夫。必ず二人とも、救ってみせるから」

変身した私を見る二人の瞳は、驚きに満ちていました。

プリキュアという正義のヒロインが、町を守るために戦っている。そんな噂が、まことしやかに囁かれていることは知っていました。そして、ネット上に、映像としてばらまかれていることも……しかし、それは都市伝説と言っても良いレベルの話で、顔が映っていることもなく、正体は謎に包まれています。

その中の一人、黄色の衣装を着た戦士が目の前に立っていたら、驚くのも当然です。更にそれが、よく知る友達の変身した姿なら余計に。

でも、今の私には関係ありません。プリキュアだって知られることは、少しだけ恥ずかしいけれども、友達を救うためならどうなっても良い。

正体がバレようとも、今の私には、戦うという選択肢以外、残されてはいないのだから。

「……来るのか？プリキュア？」

「はい、行きます。由比ちゃんと真帆ちゃんを、助けるために！」

首を傾げるような素振りを見せるナケワメーケに向かって、私は走り出します。

「はああっ！」

まるで、私に合わせるようにどつしりと構える敵に対し、重心を乗せた重いパンチを、私は繰り出しました。

「決まった！……え？」

そして、ナケワメーケの顔が変形する程に見事にめり込みましたが、何事もなかったかのように、ナケワメーケも右の拳を私に向かって振り上げます。

「くっ！」

鋭いアッパーカットを、顔を反らすことで何とか回避した私は、左の蹴りをナケワメーケのお腹にめり込ませます。

手応えを感じ、呻き声も聞こえましたが、それでも、決定的な一撃になっていないことはわかります。きっと、美希ちゃんもこんな違和感を感じていたでしょう。

私は、次の攻撃に備えて左腕を構えると、ナケワメーケが蹴り上げた右足を受け流し、間髪入れずに下ろした左足を軸に、右の回し蹴りをお見舞いしながら距離をとります。

その後、私の足元から両足を絡めとるように、黒い影のような触手が伸び、私の足を力強く締め上げてきました。

「何、これ？ 離して！」

両足を振り上げ、力任せに引き剥がそうとしますが、上手く力が入りません。

## 第七章 壊れた誠実

「第一フェーズ完了、対象の無力化を確認。第二フェーズ、凌辱による、キュアパインの破壊を開始する」

「凌辱？ おちんちん？」

目の前にある触手には亀頭があり、私にも見覚えのあるものでした。

私の家は動物病院だから、動物のおちんちんを見る機会は多くあります。それでも、こんなに大きなものは見たことがありません。

そして、ナケワメーケの言葉と、美希ちゃんが味わったであろう地獄を考えたら、この先、私の体に何が起こるのか、想像するのは簡単でした。

「ま、待って。嫌だ、いやだよ、そんなの入ら、入らない……ああ！」

悪い想像が頭を駆け巡り、恐怖に顔がひきつり始めた瞬間、別の触手がブルマのような形をした私の下着を破り捨て、下半身が露になりました。

「離れて！　なんで触手、引き剥がせないの！　い、いや！　そこ、近づかないで、ちか……あ、あああん！　おちんちん、おまんこに擦りつけないでえ！　おかしくなる、おかしくなっちゃうからあ！」

どんなに力を込めても引きちぎれない触手達に、私はパニックを起こしたように、両手両足にがむしゃらに力を込めていると、巨大な触手おちんちんの先端が、私のおまんこを擦り上げていきます。

割れ目をなぞるように、クリトリスを引っ搔けていくその仕草に、私の体は快楽を感じてしまっていたのです。



「祈里の声、凄い……」

「うん。あの祈里が、凄くエッチな声出してる」

「ああん、あつ、あん！だめ、見ないで、真帆ちゃんも、由比ちゃんも、見ないでええええん！」

そして、私は気がついてしまいました。私は今、一人じゃない。触手に弄ばれているおまんこも、はしたなく漏れ出てしまうこの声も、全部、友達の二人に見て、聞かれてしまっていることに……。

「あ、ああ、どう、したら、いい、の……ひゃあん！」

考えが、まとまらない。

快樂に流されそうになるのを、必死で押さえ込もうとしているだけでもギリギリなのに  
由比ちゃんと真帆ちゃんに恥ずかしい私を見られていると思ったら、頭の中は限界を超えてパニックを起こしてしまっています。

こんな自分を見られて、嫌われるんじゃないかという恐怖で腕と足は震え、拘束を解く力はさらに弱まり、何もできない体は、ただナケワメーケの触手に蹂躪されるだけ。

私、どうなっちゃうの？

「……え？ 止まつ、た？ ……ち、違う！ おちんちんのその角度、だめ、待って！ いやいや、ああああああっ！」

そんなことを考えた次の瞬間、私のおまんこを撫でていたおちんちん触手が動きを止めると、おまんこの中を掻き分けるように、私の中へと勢いよく突き刺さったのです。

「あ、ああ、こんな、触手なんかに、私の処女、奪われてるう」

おまんこの一番奥、子宮と思われる場所まで届いたことに、私は悲鳴を上げてしまいます。同時に、感じたこともない痛みに、私の処女膜が破られたことを、直感的に感じてしまったのです。

「やだあ、動かないで、痛い、痛いからあ！」

くちゅくちゅと鳴り響く水音に、羞恥心を覚える暇もないくらい、私の体は痛みに侵され、両目からは涙が溢れ出てしまいます。

プリキュアの力をもつてしても、内側からの痛みには耐えられないことを知り、私はただの生娘のように悲鳴を上げることしか出来ませんでした。

「もう、やめて……お願い、だか、らああああん！」

しかし、痛みによって苦しんでいたのは、最初だけだったのです。

パンパンと響き渡る、触手が子宮を無理やりこじ開けようとする音と共に、ドロツとした感触がおまんこの奥へと広がります。

すると、私の息が少しずつ荒くなり、頬が暑くなるのを感じました。

なんで、こんなにボーツとするの？それに、なんだかお股が気持ちいい……

「キュアパインの高揚を確認、膣内への媚薬散布に成功」

「び、やく？もしかして、さつきからあ、きもちいいのお、これえ！びやく、のおおおっ！！」

ヌメヌメとしたこんな気持ち悪いものに、大切なおまんこの奥を搔き回されるなんて嫌なはずなのに、こんなにも気持ち良いと求めてしまうのは、私の体に刷り込まれていく媚薬のせいでした。

「耐えなきゃ、耐えなきゃいけないのに。こんなの……むりいいいいっ！！」

止まることの無い快樂の調べに、一度目の絶頂を私は迎えてしまいます。

普段ではあり得ない、おまんこから吹き出すシャワーのような音を伴った潮に私の頬は更に暑くなります。

サンプル版キ○アパ○ン陥落く優しさの代償く（フレ○リ全滅 山吹○里編）

著者・a r t i f i c i a l s k y

発行日・二千二十六年一月